

生活支援看護学実習における学生の学習到達度

—ループリック評価指標をもとに—

栗本 一美*・木下 香織・古城 幸子・丸山 純子

新見公立大学看護学部

(2013年11月13日受理)

本学の短期大学時代、地域看護学実習と老年看護学実習で「サテライト・デイ」を行ってきた。4年制大学への移行に伴い、「サテライト・デイ」は生活支援看護学実習として新たに特色あるカリキュラムとなった。

今回、この生活支援看護学実習における「サテライト・デイ」での学生の学びをループリック評価指標を基に分析し、今後の生活支援看護学実習の課題を明らかにすることを目的とした。その結果、「サテライト・デイ」の回数を重ねるたびに学生の学びを深まっていることか明らかとなり、生活支援看護学実習の目標・目的はほぼ達成できていた。しかし、若干名であるが、学びの深まりが見られない学生もいることがわかった。したがって、個別対応の仕方やミーティングの持ち方など、学生の指導方法について工夫する必要があることが明らかとなった。

(キーワード) 生活支援, 看護学実習, 学生の学び, ループリック, 実習評価, 学習到達度

本学看護学部看護学科では、2004年度から介護予防プログラム「サテライト・デイ¹⁾」を本学の短期大学時代から市内在住の高齢者を対象に地域看護学実習と老年看護学実習の一環として行い、教育的効果をあげてきた^{2) 3)}。また、この「サテライト・デイ」は、学生の教育だけでなく、地域貢献の一環として市内在住の高齢者への介護予防事業の取り組み効果も高めている⁴⁾。

2010年、本学は短期大学から4年制大学看護学部へと移行した。「サテライト・デイ」は、大学への移行に伴うカリキュラム改正にあたり、特色あるカリキュラムとして「生活支援看護学」を科目立てし、生活支援看護学実習として行っているものである。

今回、生活支援看護学実習として取り組んだ「サテライト・デイ」での学生の学びをループリック評価指標を基に分析し、今後の生活支援看護学実習の展開と指導のあり方を考えることとした。

1. 研究方法

- 1) 調査対象：2012年度から2013年度の間で、生活支援看護学実習を体験した64名の学生が実習終了後に提出した実習総括記録用紙(ループリック)64枚とした。64枚中、同意が得られた実習総括記録用紙(ループリック)47枚を分析対象とした。
- 2) 調査期間：2012年5月～2013年7月
- 3) 分析方法：生活支援看護学実習終了後に学生が提出し

た実習総括記録用紙(ループリック)を用いて、自己評価した到達レベルが記載されている評価指数(レベル)を1週目と2週目で比較した。

また、実習総括記録用紙(ループリック)に記載されている内容を、類似性に基づき分類した。分析にあたっては、研究者間で数回の検討を重ね信頼性と妥当性の確保に努めた。

4) 倫理的配慮

対象者に研究の目的と方法、以下の6点について口頭と書面で説明した。また、対象者全員に同意書を配布し、研究協力に対しての意思確認を行い、同意が得られた対象者の実習総括記録用紙(ループリック)を分析対象とした。

- ①研究の目的と方法
- ②記録用紙に書かれている内容から個人が特定されないように配慮すること
- ③データの取り扱いについては、研究以外には使用しないこと
- ④研究への協力は自由意志であり、途中で拒否してもかまわないこと
- ⑤実習や成績と本調査は無関係であり、調査への不参加による不利益は生じないこと
- ⑥本研究、学内・外にて公表すること

*連絡先：栗本一美 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

II. 用語の定義

ルーブリックとは、それぞれの評価基準について「どこまで達しているか」という学びの質を明らかにするために、質の違いをレベルに分けて表などに整理したもの⁵⁾、学習者の学習成果を得点化するためのフォームや指針を示しており、そのフォームの中には、学習者が何を学習すべきかを示す評価基準があらかじめ設定されているもの⁶⁾である。

III. 本学における生活支援看護学実習の概要

1. 実習目的

地域で暮らす人々をコミュニティの視点で捉え、各関係機関、団体との連携・協力の基に、生活圏域で行うサテライト・デイを企画運営する。人々の健康ニーズを理解し、健康問題への支援が展開できる能力と態度を養う。

2. 実習目標

1) 地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する。

- (1) 対象者の健康観、健康ニーズ、健康行動や生活スタイルの個性が理解できる。
- (2) 生活圏域の環境や季節に応じた暮らしの実際が理解できる。
- (3) 生活圏域の歴史、伝統、文化を理解し、対象者のQOLに与える地域の影響が理解できる。
- (4) 高齢者のQOLの向上のための支援について理解できる。

2) 健康ニーズを捉えたサテライト・デイを企画する。

- (1) 安全で楽しい交流の場となるよう企画できる。
- (2) 健康レベルや生活スタイルに応じた企画ができる。
- (3) 参加者の生きがいや役割を理解し、主体性や自主性の発揮を支援する場が企画できる。
- (4) 毎日の生活の中で継続できる健康行動へとつながる企画ができる。

3) 安全で効果的なサテライト・デイを運営する。

- (1) 健康チェックや健康教育、レクリエーションが一貫した目的をもって実施できる。
- (2) 参加者の身体的状況をアセスメントし、活動の中での配慮に気づき支援できる。
- (3) 参加者との交流を通してコミュニケーション能力を育て、社会的な行動ができる。
(目上の人に対する言葉遣い、聴く姿勢、周囲への配慮など)
- (4) 参加者の知恵発信の場作りを学び、参加者個々が活かされる支援ができる。

4) サテライト・デイの学びと課題が評価できる。

- (1) 参加者との交流によって得られた学びを共有することができる。

(2) 介護予防活動としてのサテライト・デイの意義が理解できる。

(3) 参加者の健康問題と今後の課題について考察できる。

(4) 関係機関との連携や協力など、地域ネットワークの重要性が理解できる。

(5) 地域に暮らす人々が健康問題により医療の対象者になるという連続性が認識できる。

5) 学習者としての省察と課題の明確化ができる。

- (1) 積極的に実習に参加することができる。
- (2) この実習での学習成果を述べることができる。
- (3) エビデンスを備えた学習ができる。
- (4) 積極的に発言し、グループでの学習に貢献することができる。
- (5) この実習で明確になった学習上の課題を述べることができる。
- (6) 学習上の課題を克服のための方法を見出すことができる。

3. 実習方法

生活支援看護学実習は、2週間を1クールとし、看護学部3年次生の後期から看護学4年次生の前期にかけて行う。1グループ8名の学生が同時に2グループ16名で実習に臨む。学生は、1週目に16名全員でA地区に向き「サテライト・デイ」を実施する。そして、2週目では、8名ずつでB・Cの2か所の地区に分かれて行い、2週目の最後には16名全員でD地区に向き実施する。2週間で計4カ所の地域で「サテライト・デイ」を行っている。2週間のうち、「サテライト・デイ」を実施しない日は、学内で企画・評価・修正を繰り返し行っている(表1)。

表1 生活支援看護学実習方法(例)

期間	場所	内容
1週目	月 学内	サテライト・デイ企画・準備
	火 学内	サテライト・デイ企画・準備
	水 学内	サテライト・デイ企画・準備・リハーサル
	木 実習	サテライト・デイ (A地区)
	金 学内	前日の反省・評価・次回への修正 1週間の反省と学びの明確化
2週目	月 学内	サテライト・デイ企画・準備・リハーサル
	火 実習	サテライト・デイ (B地区・C地区)
	水 学内	前日の反省・評価・翌日の準備・リハーサル
	木 実習	サテライト・デイ (D地区)
	金 学内	前日の反省・評価・2週間の反省と学びの明確化

VI. 結果

図1にて、生活支援看護学実習での学生の学習到達度について示す。

実習総括ループリックの評価指標(実習目標)(表2)に沿って、それぞれの目標の到達度をレベル1・2・3で表現し、各目標のレベルの学びを<>で記載する。

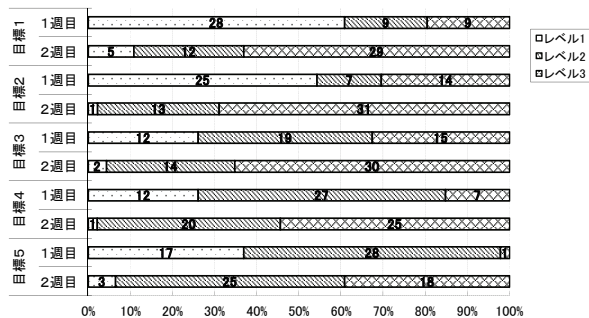


図1 生活支援看護学実習の学生の学習到達度

1. 実習目標 1：地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する

1週目では、60.0%の学生がレベル1「生活圏域の環境や季節に応じた暮らしの実際が理解できた」「生活圏域の環境や季節に応じた暮らしの実際が理解できた」を示した。一方、レベル2、レベル3の到達度を示した学生は19.5%であった。

2週目では、63%の学生がレベル3の「高齢者のQOLの向上のための支援について理解できた」を示していた。次いで、26.0%の学生がレベル2を示し、10.8%の学生がレベル1を示していた。2週間目に目標レベルが上がった学生は65.2%いたが、レベル1のままの学生も13.0%いた。

学生の具体的学びとして、レベル1では<対象者は、健康に関心を持って生活をされていた><田畑の仕事をして生活をしている高齢者が多い><交通が不便であり、高齢でもあり、買い物や通院が大変だと感じた>などを学んでいた。

レベル2では<高齢者とコミュニケーションを取ること、戦争体験の大変苦勞されてきた歴史を知ることができた><戦争体験をされているので、物を簡単に捨てたり、粗末に使わず大切に使おうとされていることがわかった><自宅で野菜を作られたり、地域住民との関係性を大切にしながらそれぞれの地域に応じた生活をされている>などを学んでいた。

レベル3では<対象者の生活背景を知ること、その人のQOLの向上を目指す上で大切><生活背景を知ること、その人に合った健康指導を行う上で大切であ

る><戦争体験は、高齢者の考え方や心理面に影響を与えている因子の一つであることを実感した>などの学びがあった。

2. 目標 II：健康ニーズを捉えたサテライト・デイを企画する。

1週目では、54.3%の学生がレベル1の「安全で楽しい交流の場となるよう企画できた」を示していた。次いで、30.0%の学生がレベル3の「参加者の生きがいや役割を理解し、主体性や自主性の発揮を支援する場が企画できた」「毎日の生活の中で継続できる健康行動へつなげる企画ができた」を示した。そして、15.2%の学生がレベル2の「健康レベルや生活スタイルに応じた企画ができた」であった。

2週目では、67.3%の学生がレベル3を示し、次いで、28.2%の学生がレベル2を示し、2%の学生がレベル1のままであった。2週間目に目標レベルが上がった学生が65.2%いた。

学生の具体的学びとして、レベル1では<定期的に同じ場に来ることで、対象者同士の交流の場になっていることが分かった><実際に転倒される方はおられなかったが、再々の声かけと知覚にいる学生が注意することの必要性を感じた>などがあった。

レベル2では<対象者の普段の生活に活かすことが出来る健康教室を実施することが出来た><健康教室では、対象者の方が高血圧の方が多く、高血圧の予防として、高齢者が良く食べられる食品をピックアップした企画が出来た>などがあった。

レベル3では<対象者の日常生活で取り入れることが出来る内容で健康教室を実施し、「今度から気をつけよう」という反応が返ってきたので、生活の中で継続できる健康行動に繋がったと思う><参加者の主体性を支援できる企画が出来た><1つひとつのサテライト・デイは別々のものではなく、連続しているものだと実感した>などがあった。

3. 目標 III：安全で効果的なサテライト・デイを運営する

1週目では、41.3%の学生がレベル2「参加者の知恵発信の場作りを学び、参加者個々が活かされる支援ができた」「参加者の知恵発信の場作りを学び、参加者個々が活かされる支援ができた」を示した。次いで、32.6%の学生がレベル3の「参加者との交流を通してコミュニケーション能力を育て、社会的な行動ができた(目上の人に対する言葉遣い、聴く姿勢、周囲への配慮など)」を示した。レベル1の「健康チェックや健康教育、レクリエーションが一貫した目的をもって実施できた」を示した学生は、26.0%であった。

2週目では、65.2%の学生がレベル3を示し、次いで、28.2%の学生がレベル2、4.3%の学生がレベル1であった。2週間目に目標レベルが上がった学生が47.8%であった。一方レベル1のままの学生は6.52%であった。

学生の具体的学びとして、レベル1では<健康教室とレクリエーションとの関連性を付けて企画することが出来た><学生それぞれが担当を持っているが、どんな内容や目的で行うか全員で把握することが出来た><健康教育とレクリエーションに関連のあるものをする事によって、より生活習慣を振り返ることに繋がったと思う>などがあった。

レベル2では<転倒される方はいなかったが、安全面の配慮として、声かけや見守り、一緒に歩くと言うことが必要だと感じた><健康教室への参加者は限定されているが、その人を介して友人や家族等に伝わることで多くの人々に学習効果が波及すると感じた>などがあった。

レベル3では<対象者の生活状況聞き、アセスメントをして助言することが出来た><高齢者は人生の大先輩の存在であり、言葉遣いや聴く姿勢に敬意を持って関わることが重要であると思った><サテライト・デイは、対象者と共にひとつの物を作り上げるというコミュニケーションの場である>などがあった。

4. 目標Ⅳ：サテライト・デイの学びと課題が評価できる

1週目では、58.6%の学生がレベル2「介護予防活動としてのサテライト・デイの意義が理解できた」「参加者の健康問題と今後の課題について考察できた参加者の知恵発信の場作りを学び、参加者個々が活かされる支援ができた」を示した。次いで、26.0%の学生がレベル1の「参加者との交流によって得られた学びを共有することができた」を示した。そして、15.2%の学生が「関係機関との連携や協力など、地域ネットワークの重要性が理解できた」「地域に暮らす人々が健康問題により医療の対象者になるという連続性が認識できた」を示した。

2週目では、54.3%の学生がレベル3を示し、次いで、43.4%の学生がレベル2、2.0%の学生がレベル1であった。2週間目に目標レベルが上がった学生が58.6%おり、レベル1のままであった学生は2.17%であった。

学生の具体的学びとして、レベル1では<レクで対抗戦ではあるが公平性が保たれていなかったことに気付くことが出来た><他者からの意見を聞くことにより、サテライト・デイの評価を違う視点から見ることが出来、反省会をすることでより良いものになると感じた><他者と学びを共有することで自分自身が気付かなかった視点を感じる事が出来、さらに幅広い視野で捉えていく必要性を感じた>などであった。

レベル2では、<サテライト・デイは、正しい知識の

提供や健康意識の育成の場である一方、対象者から私たちは学ぶことも多く、対象者の自尊感情を高める場にもなっている><サテライト・デイを継続して参加することによって、参加者の健康状態を把握することが出来、健康意識を高める機会になる><サテライト・デイは、対象者が自分らしく生きていくための生活の場の一部であると感じた>などであった。

レベル3では<市内の大きな連携があることを知り、市全体の地域ネットワークの重要性を理解することが出来た><対象者が病気になり入院すると生活者から患者に変わってしまうことを実感した><対象者の方たちは、自分たちでネットワークを広げていこうという意識があり、各地区で連携がなされているからこそ、皆が楽しく参加されているのだと感じた>などであった。

5. 目標Ⅴ：学習者としての省察と課題の明確化ができる

1週目では、60.8%の学生がレベル2の「エビデンスを備えた学習ができた」「積極的に発言し、グループでの学習(グループダイナミクス)に貢献することができた」「この実習で明確になった学習上の課題を述べる事ができる」を示した。次いで、36.9%の学生がレベル1の「積極的に実習に参加することができた」「この実習での学習成果を述べる事ができる参加者との交流によって得られた学びを共有することができた」を示した。そして、2.0%の学生がレベル3の「学習上の課題克服のための方法を見出すことができた」を示した。

2週目では、54.9%の学生がレベル2を示し、次いで、39.1%の学生がレベル3を示し、6.5%の学生がレベル1であった。2週間目に目標レベルが上がった学生が60.8%おり、レベル1のままであった学生は4.3%であった。また、2週目にレベルが低下した学生が4.3%いた。

学生の具体的学びとして、レベル1では<参加者の知識と実践をつなげるには、対象者の目線に立つことが必要><サテライト・デイは参加者が主体であることを忘れてはならない><参加者の立場に立って一緒に改善策を考えていくように支援していかなければならない>などがあった。

レベル2では<対象者の生活支援を行うには、多角的な視点から物事をとらえ、提供していくことが重要である><事前準備が大切であり、細かな動き、自分だけでなく相手の行動を把握し、臨機応変に対応することの重要さと大変さを学んだ><臨機応変に対応ができることが今後の課題>などがあった。

レベル3では<対象者の地域性を考えた教育や予防作りが大切><人に何かを伝える時は必ず根拠が必要であり、根拠がなくては相手に伝わらないと思った><対象者と共に考えることで改善点を見つけることが出来、よ

り意識づけになると思った><サテライトが回数を重ねるごとに良い物になっていったと思うが、それは、毎回、学びと反省を伝えあい意見を出し合っただけに繋げることが出来たからだと思う>などがあった。

V. 考察

1) 地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する

学生は、実習目標 I である「地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する」に関して、自己評価することが出来ていた。学生は、参加者が暮らす地域に実際に出向くことで、交通の不便さや地域環境を肌で感じ、そして参加者とふれ合うことで、参加者の生きてこられた背景や現在の暮らしぶりなどを知ることが出来、学びにつながっていると言える。このことは、「サテライト・デイ」の基本主旨である参加者の地域へ学生と教員が出向くからこそ得られる学びだと考える。一方、2週目でも学びが深まらずレベル1の学生が数名いた。この学生は、対象者の背景や暮らし、各地域の地域性などを捉えることはできており、対象者個々の生活に応じた関わりをしていく必要性などは学ぶことが出来ていた。しかし、対象者のQOLの向上のための支援については学びに至っていなかった。対象者個々の生活に応じた関わりをしていく必要性の学びから、高齢者のQOLの向上への支援に繋がる視点を伝え、学生の学びが深まるような指導が必要だと考える。

2) 健康ニーズを捉えたサテライト・デイを企画する

実習目標 II である「健康ニーズを捉えたサテライト・デイを企画する」に関しては、「サテライト・デイ」の目的である「交流の場として閉じこもり予防」や「参加者の生きがいづくりの場」などを理解したうえで企画をすることが出来ていた。そして、サテライト・デイの回数を重ねることにより、<参加者の主体性を支援できる企画が出来た>や<1つ1つのサテライト・デイは別々のものではなく、連続しているものだと実感した>などの学びにつながったと考える。参加者の主体性を大切にするとする視点やサテライト・デイの中で行なう指導や健康測定は参加者にとって、連続性のあるものであるという視点は、これから看護職として現場に立ち、多くの対象者へ指導を行っていく上で必要な視点である。対象者へ指導を行っていく際に、相手の意思と価値観や信念を整理し、対象者の主体性を支援しながら対象者自身が自己の問題に気づき問題解決に取り組められるような関わりを持つことになる。その際に、今回の学びは有益なものだと言える。

3) 安全で効果的なサテライト・デイを運営する

実習目標 III である「安全で効果的なサテライト・デイを運営する」に関しては、実習目標 II と連動してサテライト・デイの目的を理解したうえで運営をすることが出来

ていた。そして、異世代交流の少ない学生にとって高齢者とのコミュニケーションを取ることを苦手とする学生も多い。しかし、サテライト・デイの回数を重ねることにより、高齢者とのコミュニケーションを通して、<高齢者は人生の大先輩的存在であり、言葉遣いや聴く姿勢に敬意を持って関わることが重要であると思った>など、対象者に対して敬意をもって接する大切さや高齢者の身体的特徴を捉え、転倒のリスクを考えた配慮の必要性など具体的に考えることが出来ていた。一方、43%の学生の学習到達度の深まりがみられていなかった。その学生の学習状況を考慮すると、1週目ではサテライト・デイを実施することが目的となっており、実習する上での安全性や対象者への配慮にまで至っていないことを学生自身が気付いた。2週目では、1週目の課題を活かし対象者への安全性への配慮を行いながら、サテライト・デイを運営することが出来ており、1週目での学びを2週目では活かすことはできていた。しかし、学習進度はレベル1の段階で終わっており、対象者とコミュニケーションを図り、対象者個々の背景や身体状況など交流を通しての学びが出来ていなかったように思われる。教員は、高齢者など異世代交流が苦手な学生の背景も考慮し、学生が対象者とコミュニケーションが取れるように関わっていくことが必要だと考える。

4) サテライト・デイの学びと課題が評価できる

実習目標 IV である「サテライト・デイの学びと課題が評価できる」に関しては、1週目から介護予防活動としてのサテライト・デイの意義を理解することが出来ており、サテライト・デイとしての評価を行うこともできていた。しかし、レベル3の「関係機関との連携」が若干見えにくかったと思われる。サテライト・デイは、老人クラブを中心に各地区の市民センター、福祉ネットワークや送迎ボランティア等の機関と連携して行っている。学生にはオリエンテーション時に伝えるが、実際のサテライト・デイの場では一部の機関の活動しか見ることができない。そのため学びに繋がりにくかったのではないかと考える。関係機関との連携については、学生への提示方法の検討をしていきたい。

5) 学習者としての省察と課題の明確化ができる

実習目標 V である「学習者としての省察と課題の明確化ができる」に関しては、<サテライトが回数を重ねるごとに良いものになっていったと思うが、それは、毎回、学びと反省を伝えあい意見を出し合っただけに繋げることが出来たからだと思う>などの学びがあったように、1週目から、学生は積極的に発言し、上手くグループダイナミクスを活用した学習が展開できていた。16名が一つのチームとして1つの目標に向かってやり遂げる体験は、発表やグループ討議を繰り返すことにより、自己学習能力を高めることにもつながり、将来チームで動く看

護職として働く学生にとって、生涯学習教育を育てる視点や自己評価をする視点を身につける場にもなると考える。

6) 生活支援看護学実習指導での今後の課題

生活支援看護学実習指導を行うにあたっての今後の課題として、実習目標 I～Vのレベルにおいて学習到達度に変化が見られない学生がいることが分かり、個々の学生の学習到達度に合わせて指導をしていく必要が考えられた。

ルーブリックについて、糸賀は「学生の学習プロセスにおいて、ルーブリックの評価基準を見ながら実習計画に入れたり、実習途中で確認したりしながら、達成できない課題を達成できるようにしている」と報告している⁷⁾。したがって、学生が学習していくプロセスの中で、自己の学習課題を明らかにしながら主体的に学習プロセスを歩むのに有効であり、学生が今との段階にいるのか視覚的に確認することができる指標としても有効だと考える。しかし、ルーブリックでの学習の経験の少ない学生の場合、あるいは、自己評価の評価視点をよく理解できていない学生の場合は、ルーブリックの内容の理解とルーブリックを用いて評価することが難しいと指摘されている⁸⁾。本調査でも同様のことが言え、ルーブリックを用いた自己評価に慣れていない学生が評価視点の内容を考える際に、学生によって評価視点の捉え方に違いがあることが推察される。今後は、ルーブリックの評価基準の見直しや学生が自己評価をする際に評価した理由なども記載するよう指導することが必要である。また、サテライト・デイ実施後に行なうミーティングにおいて、学生が発表する

自己評価の内容とルーブリックの評価基準を照らし合わせ帰納的な学習の促進も必要と考える。

文献

- 1) 栗本一美・古城幸子・木下香織他：在宅高齢者を対象としたサテライト・デイの運営評価. 新見公立短期大学紀要, 26; 177-187, 2005.
- 2) 古城幸子・栗本一美・木下香織他：看護学生が在宅高齢者の生活圏域で実施する「サテライト・デイ」での教育効果. 日本看護福祉学会誌, 1(1); 14-15, 2006.
- 3) 古城幸子・栗本一美・木下香織他：看護学生が在宅高齢者の生活圏域で実施する「サテライト・デイ」での教育効果. 日本看護福祉学会誌, 1(1); 14-15, 2006.
- 4) 栗本一美・太湯好子：中山問部の在宅高齢者の健康と生活を支える介護予防活動に関する研究. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 15(1), 73-81, 2008.
- 5) 安藤輝次：一般的ルーブリックの必要性. 教育実践総合センター研究紀要, (17); 1-10, 2008
- 6) 高浦勝義：絶対的評価とルーブリックの理論と実際. 59-90, 黎明書房, 2004
- 7) 糸賀陽子:基礎看護学実習での導入ポートフォリオとルーブリックを用いた評価の実際.看護教育,15 (12) :1048-1056,2010.
- 8) 寺嶋浩介・林朋美:ルーブリック野構造により自己評価を促す問題解決の開発.京都大学高等教育研究,12,63-71,2006.

表2. 実習総括（ルーブリック）評価指標

スケール	実習目標の自己評価				学習者としての学習者としての省察と課題の明確化ができる
	1. 地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する	2. 健康ニーズを捉えたサテライト・デイを企画する	3. 安全で効果的なサテライト・デイを運営する	4. サテライト・デイの学びと課題が評価できる	
レベル1	<ul style="list-style-type: none"> ・対象者の健康観、健康ニーズ、健康行動や生活スタイルの個性が理解できた ・生活圏域の環境や季節に応じた暮らしの実際が理解できた 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全で楽しい交流の場となるよう企画できた 	<ul style="list-style-type: none"> ・健康チェックや健康教育、レクリエーションが一貫した目的をもって実施できた 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者との交流によって得られた学びを共有することができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に実習に参加することができた ・この実習での学習成果を述べる事ができる
レベル2	<ul style="list-style-type: none"> ・生活圏域の歴史、伝統文化を理解し、対象者のQOLに与える地域の影響が理解できた 	<ul style="list-style-type: none"> ・健康レベルや生活スタイルに応じた企画ができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の身体的状況をアセスメントし、活動中での配慮に気づき支援できた ・参加者の知恵発信の場作りを学び、参加者個々が活かされる支援ができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・介護予防活動としてのサテライト・デイの意義が理解できた ・参加者の健康問題と今後の課題について考察できた 	<ul style="list-style-type: none"> ・エビデンスを備えた学習ができた ・積極的に発言し、グループでの学習(グループダイナミクス)に貢献することができた ・この実習で明確になった学習上の課題を述べる事ができる
レベル3	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者のQOLの向上のための支援について理解できた 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の生きがいや役割を理解し、主体性や自主性の発揮を支援する場が企画できた ・毎日の生活の中で継続できる健康行動へとつながる企画ができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者との交流を通してコミュニケーション能力を育て、社会的な行動ができた(目上の人に対する言葉遣い、聴く姿勢、周囲への配慮など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関との連携や協力など、地域ネットワークの重要性が理解できた ・地域に暮らす人々が健康問題により医療の対象者になるという連続性が認識できた 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習上の課題克服のための方法を見出すことができた